

槐陰拾葉

葉

14  
2478  
242





初冬 時雨 落葉 朝霜 寒草 千鳥 多鳥 氷初結 冬月 鷹抄 野藪

冬 冬來ぬと山風をきく風の音もくさすや  
 初冬にきくまてたふふ冬の雲はうれし先時より  
 ひくこと深きうれれたるまねの六風の音も  
 夜の程に枕をうけ風をきくこの葉をうけし  
 はまれば秋の来り絶ふうけぬれこの冬草  
 さきよりさきう方にむねをきくともぬ友千鳥うね  
 是も又もねをきくうねれつういさきもぬ池の鷺鳥  
 せき入る岩のあやうねしきにもぬ声むせつたり  
 木々皆落葉の後をきく松の月月のさうりぬれ  
 つれても今よりさきもぬねのさきとをきくや  
 羊刈のさきにもぬねさきとをきくや



泣つけさうも雪上踏みてさうなる雪の物に  
 光になぬ山もあけハ光さく雪に降く瓦上も光ぬ  
 春は今も光ぬもほろや雪とたり乃た雪の内  
 せめて身にさぬけつハ年とたる斗やいとあません  
 聞え内にさうなる雪も枯れ屋の時乃多とさるに似せ  
 みそさうぬ色の千種と木の下に吹けつめハ風の落葉  
 枯れさうなる雪とみハ朝あく雪とて形もさうも嘆き  
 中に抱おる雪もさうさ秋の名枯つてもぬ冬は夜の月  
 冬枯の雪もさうも村芦のうさむきハ難波江れ里  
 風雪とさうさうなる雪もさうも永に浪のあやみずん  
 さうさうなる雪に千鳥の声すきさうも江の雪たなみずん  
 降雪もさうさうなる雪の雪にさう光とさうもさうさう

庭の面にはササキ水鳥羽月をさむくつゝおぼり  
通ひこし道よりききてすうと雲のまなき神の眠る  
なる人にやういふさへあるべしただ宿まぬ夜のお雪  
糸井のよきとありつて御心持ともや神楽乃彦をなぐ  
立身とまにみえて一うと片神々多にみる将人  
冬はふね神煙もめたんかあうかともし小神の炭火  
わす事とほじ今およそひにおひ馴らる年の暮  
吹ちてお風のなれ一ととり雲を走れてする所をこれ  
は浪の音氷にさらしてを境をく千鳥やうなり  
やうくと又雪けの雲々にたりるさとしかゆふ言ふ煙も  
さうと風車の枕にあきてけるささすう後我みうを  
いつらんやなせといへば子鳥濱やちにとどめて

幸の夜の夜間にあれりとおもふ雲も霞なり

今如まゝは方の峯に積りておきよりすり落し

喬きやうう花はなとちふふ有あのの内うちにまささのの茂も也

はなよなよもさしねし  
朝多かりけあけぬと思ふて都の富士の山の雪

このおきよの世に雪の大いさを平にあげぬ年が八三

おひやうおひあさへ車路しわう却の屋敷の石

雪に今朝あけぬとてにたりすもこゝろ松も修葺せし

吹くも嵐を巻くもふらふらにたの山松の丁茶

本棹しよりぬきとみて松のて常盤の色も涂き雲

校あり文電をよそへて之をぬ松のれに署れ本祐

平くともなをもとす  
 美我ハむ待候の雪は  
 急園

是より待に絶つて雷の半をとりてさへうと云ふ

けうれき  
 年々  
 走る  
 へ  
 白雪  
 や山と  
 なる  
 ち  
 なる  
 積る

おれもぬかの事象しやうよあは雪の山とんも

神祇

神祇

なりて人となりしれは外より我國守り神の國は

我國神よりあつたの原水すむ人国もなすはて

天造神ももともちあつてん我日本乃國守り

君の神ももちあつてん本國多すも我日本乃國守り

我日本乃國守り三葉山君とたの道をとて

誰ももちあつてん我日本乃國守り

君神ももちあつてん我日本乃國守り

我日本乃國守り

我日本乃國守り

我日本乃國守り

我日本乃國守り

我日本乃國守り

我日本乃國守り

我日本乃國守り

我日本乃國守り

我日本乃國守り



旅宿  
山家  
罪人  
寺鐘  
旅行

おのれ声聞ふに神とて旅宿なり 防浦風を吹  
奥やまの下の宿に候ぬ梢のやに猿さくらをれ  
おのれ日教あるにぬかり 都さし山と云ふかて  
こゝろす 豊やみ寺の日教をて西よぬり入おの宿  
都ぬさうさむし申し 浮きし船山にから猿の道お

旅宿  
山家  
罪人  
寺鐘  
旅行

雑  
すまゐる世々今活山のまの宿都の乾又まのふも  
見えむれい各々もてなり 都山休見の里へまてこて  
おのれ日教あるにぬかり 都さし山と云ふかて  
こゝろす 豊やみ寺の日教をて西よぬり入おの宿  
都ぬさうさむし申し 浮きし船山にから猿の道お



